



Data

監督・脚本：黒沢清

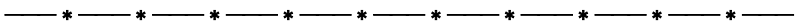
出演：タハール・ラヒム／コンスタンス・ルソー／オリヴィエ・グルメ／マチュー・アマルリック／マリック・ジディ／ヴァレリ・シビラ／ジャック・コラール

👁️👁️ みどころ

ホラー映画の得意な黒沢清監督が、フランスを舞台にフランス人俳優、全編フランス語でホラー・ラブロマンスに初挑戦！ところで「ダゲレオタイプ」とは一体ナニ？チラシを見て一瞬SM映画かと錯覚したが、それは全くの誤解！

大きなお屋敷での銀板写真をめぐる摩訶不思議な展開と、時には中世の貴婦人、時にはシルヴィ・バルタンのような美女に注目しながら、生者と死者の境目が不明なストーリーを堪能したい。

もっとも、後半からラストにかけての土地開発をめぐる展開が世俗的になりすぎたのは、少し残念・・・。



■□■ダゲレオタイプとは？ひょっとしてこりゃSM映画？■□■

黒沢清監督の『Seventh Code (セブンスコード)』(13年) (『シネマルーム32』未掲載) は面白かったし、2015年の第68回カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門で日本人初の監督賞を受賞した『岸辺の旅』(15年) もなかなかのものだった (『シネマルーム37』247頁参照)。しかし『クリーピー 偽りの隣人』(16年) はワケがわからなさすぎて、イマイチだった (『シネマルーム38』84頁参照)。そんな黒沢清監督が、『第九軍団のワシ』(10年) (『シネマルーム28』104頁参照)、『パリ、ただよう花 (Love and Bruises)』(11年) (『シネマルーム32』136頁参照)、『ある過去の行方』(13年) (『シネマルーム33』113頁参照) 等に出演していたタハール・ラヒムをはじめ、オールフランス人俳優、オールフランス語で監督した映画が本作だ。

「ダゲレオタイプ」と言われても何のことかサッパリわからないが、中世風の美しい青色のドレスを着た若く美しい女性が拘束具のようなもので固定されているチラシを見ると、これは一体ナニ？ひょっとして、本作はサド・マゾのフランス映画？『Seventh Code（セブンスコード）』で前田敦子を起用してあっと驚くアクション映画に挑戦した黒沢清監督が、新たにそういう分野に進出したの？一瞬、そう誤解したが・・・。

■お屋敷を舞台に大口ロマンスが・・・？■

「銀板写真」と言えば小学生の理科の実験でやった記憶があり、おぼろげなイメージをつかめるが、デジカメ全盛時代の今でも動かない死者を撮影する時などには、被写体を長時間固定しておかなければならぬこの銀板写真が使われることがあるらしい。本作の一方の主人公は、巨大なお屋敷内に写真スタジオを持ち、もっぱらその銀板写真による写真撮影でそれなりの人気を博しているステファン（オリヴィエ・グルメ）。もう1人の主人公はその助手として、引退するルイ（ジャック・コラル）に代わって新たにスタジオに雇われた若者ジャン（タハール・ラヒム）だ。

本作冒頭はお屋敷でのジャンの「面接」シーンから始まるが、そこに見る「ダゲレオタイプ」を中心とした写真撮影の風景はいかにも異様。もちろん、ホラーを得意とする黒沢清監督作品だから、ロクな説明もないまま一方でステファンの母親が死亡した理由が示され、他方でステファンのモデルをしているステファンの娘マリー（コンスタンス・ルソー）が植物園の仕事で自立したいと願い、就職活動が続ける姿を見せてくれるが、ちょっと不気味な大きなお屋敷の中でのジャンとマリーの出会いを見れば、誰でもこれからどんなロマンスが展開していくのかが興味の焦点に・・・。

■この美女は死んだの？それとも・・・？■

ある日、長時間のダゲレオタイプによる固定のため倒れてしまい、階段から転げ落ちたマリーが死んでしまった（？）ところから、大きく物語が動いていく。ステファンは勝手にマリーが死んでしまったと決めつけていたが、ジャンはまだ息のあるマリーを車に乗せて病院に運び込もうとしたのは当然。ところが、後部座席に寝かせていたマリーに必死に語りかけながら車を運転していたため、ちょっとした事故になりかけると、マリーが車の中から消えてしまうことに・・・。こりゃ一体何？その後、黒沢清監督作品らしく森の中から突然マリーが現れたうえ、頭の傷も消えてしまっていたから更にアレ・・・？

しかして、ジャンは自分のアパートでマリーと一緒に生活することになっていくが、以降ジャンはステファンの屋敷を含む一帯の開発を目指している土地開発業者のトマ（リック・ジディ）と結託し、ステファンの屋敷の売却を狙うことに・・・。

■不動産を巡る生々しい現実・・・？■

自殺によって妻を失ってしまったのと同じように、今は一人娘マリーも失ってしまったステファンは意気消沈していたから、今やジャンはステファンのお屋敷内で不動産の権利証捜しを含めてやりたい放題。そして、ステファンがお屋敷の売却同意書になかなかサインしないと見ると、『太陽がいっぱい』（60年）の中でアラン・ドロンがやっていたのと同じように、ステファンのサインの練習をして売却同意書にステファンのサインを偽造するまでに……。しかも、トマから500～600万ユーロと言われていた売却価格を450万ユーロとし、差額の50万ユーロは自分の懐に入れるしたたかさも見せてくるから、アレ……。本作は黒沢清監督によるホラー・ラブロマンスじゃなかったの……。こんな悪徳不動産屋まがいの違法行為がスクリーン上で生々しく展開してくると、生きてるのか死んでいるのかを曖昧にしたままのマリーの幻想的な美しさと、そんなマリーとジャンの恋模様の展開が少しずつ興奮状態になっていくことに……。

さらに、本作ラストでは娘を失ったことに絶望したステファンが再び某女性の銀板写真を撮るシーンが登場するが、この展開もイマイチ。また、自殺を決意したらしいステファンが拳銃を手にして机の前に座っている時、たまたまジャンがお屋敷を訪れるのもちよっと偶然が過ぎる。さらに、その場にたまたまトマがやってくるのも、ストーリー的に（脚本上）最後のつじつまあわせのような感じになっている。マノエル・ド・オリヴェイラ監督の『アンジェリカの微笑み』（10年）は幻想的な映画で賛否両論が分かれた（『シネマルーム37』未掲載）が、本作ラストに見るジャンとマリーの車で2人旅もそれと同じような雰囲気になる。それをハッピーエンドと見るのかどうかは解釈次第だが、さてあなたの解釈は……？

■■■ 評論家たちの採点は？ 評価は？ ■■■

『キネマ旬報』10月下旬号は「亡霊はリュミエールの国へ還る」と題して本作を特集し、①「愛の怪談と銀色の陰影」と題した川口敦子氏による黒沢清監督のインタビュー、②「ぼくは亡霊と愛を交わした」と題した坂本安美氏のタハール・ラヒムへのインタビュー、③「『ダグレオタイプ』の女」が出来るまで」と題した吉武美知子氏のコラムを掲載しているが、これは要するに本作がそこまでの話題性があるからだ。

クラシカルな青いドレスを着たマリーも美しいが、ジャンの部屋の中でミニスカート姿で新妻のように甲斐甲斐しく働くマリーのショートカット姿は、かつて一世を風靡したフランス人歌手シルヴィ・ヴァルタンを彷彿させて美しい。M・ナイト・シャマラン監督の『シックス・センス』（99年）は最後までマルコム・クロウが死亡していることを観客にわからなくしていたため、最後のあつと驚く結末が話題を呼んだが、本作ではマリーは既に死んでいることがミエミエだから、ジャンの芝居もマリーの芝居も嘘っぽくなってしまふ。とりわけ、マリーの姿が消えてしまってからジャンが一人でマリーに語りかけるシーンは、神秘的というよりマンガ的になってしまっている。そんなこんなを考えると、本作

は黒沢清監督作品としてはイマイチ・・・。

ちなみに、『キネマ旬報』11月下旬号の「REVIEW 鑑賞ガイド」では3人の評論家のうち2人が星5つをつけているし、星3つの評論家の文章も美辞麗句に満ちている。他方で、10月28日付日本経済新聞の「シネマ万華鏡」では、映画評論家の宇田川幸洋氏は「だが、後半、それまで視点人物に徹していたジャンが、下世話な犯罪者に転じると、まるで陳腐になる。もったいない。」と書いている。私はこれに全面的に賛成だが・・・。

2016（平成28）年11月2日記